

# ケンブリッジ・プラトニストの宗教の哲学的靈性

## ——説教・講話における聖句と古典テキストの交互引用の手法——

### 三上 章

#### 目的と方法

本稿の目的は、ケンブリッジ・プラトニスト (the Cambridge Platonists. 以下 CP と略す) を代表する、ベンジャミン・ウィチカット、レイフ・カドワース、ジョン・スミス、ヘンリ・モアの四人における「哲学的靈性」を垣間見ることである。哲学的靈性とは、CP における靈性と愛智の相互作用が醸成する深みのある精神的境地のことをいう。それは、宗教の儀式や教説に還元されることができない、宗教の核心・生命をさす。これを垣間見るために、CP の説教・講話においてひんばんに繰り返される、聖句と古典テキストの交互的引用に着目し、その手法を吟味する。

#### 1 ケンブリッジ・プラトニスト

##### 1.1 名称の由来

17 世紀イングランド内戦とそれに直結する時代 (1642-1665)<sup>1</sup>は、政治紛争と神学論争が激しく錯綜する時代であった。その時代と重なる 1633 年から 1688 年にかけて<sup>2</sup>、激動の渦から距離を保ち、愛智の道に邁進した一連のキリスト者たちがいた。彼らの多くは、若き日にケンブリッジ大学のエマヌエル学寮において、プラトン、プロティノス及びその流れをくむ哲学者たちの思想を学んだ。その後もケンブリッジの諸学寮に留まり、そこを拠点に研究・教育を続け、学寮チャペルを中心に説教・講話を行った。それにより “The Cambridge Platonists” 「ケンブリッジ・プラトニスト」と呼ばれる<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 1642 年の第 1 次イングランド内戦開始から 1665 年のクラレンドン法典の制定完了までの時期。

<sup>2</sup> 1633 年は、ベンジャミン・ウィチカットが、エマヌエル学寮のフェローに選ばれた年である。その前後に、レイフ・カドワースとジョン・スミスがエマヌエル学寮に入寮している。1688 年は、CP の中で一番長生きしたヘンリ・モアの没年である。

<sup>3</sup> F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists A Study* (J. M. Dent & Sons LTD., 1926) は、上記四人の他に、ナサニエル・カルヴァウエル (Nathaniel Culverwell, 1618?-1651) とピーター・ステリー (Peter Sterry, 1613-1672) を加える。

## 1.2 ケンブリッジ・プラトニストの特徴

筆者の見る CP の特徴は、以下のとおりである<sup>4</sup>。

### (1) ピューリタン・カルヴィニズムからプラトン主義的キリスト教への変容

CP は、ピューリタン・カルヴィニズム (Puritan Calvinism. 以後 PurC と略す) の教育を受けて育ったが、やがてその教条主義に閉塞感を覚え、より自由で内面的な境地を希求するに至った。彼らが見出した活路は、プラトニズムであった。彼らはその泉から哲学的活力をくみ取り、それを聖書と教義の理解に注入した。

### (2) 聖句と古典テキストの相互作用による哲学的靈性の醸成

CP は聖書を精読すると同時に西洋古典を愛読した。先ず聖句を読み、続いて聖句を古典テキストに照らして読み、翻って古典テキストを聖句に照らして読む、という相互作用の漸進的繰り返しによって、哲学的靈性ともいふべき境地を醸成していった。それは愛智が宗教的靈性を主導する中で、理性と靈性がかぎりなく不一不二のあり方に収斂していく境地である。カッシーラーの、「(CP が問題としたのは) たんに宗教上の地平を広げることではなく、信仰心を新たな基層へ、別の次元へ深化させることであった」という見解は、当を得ている<sup>5</sup>。

### (3) 動乱の時代に不惜身命で説教・講話に専念

CP は、説教・講話に不惜身命で専念し、それに哲学的靈性を注入した。当時の社会では、説教が最も効果的な大量伝達手段であった。それは単に宗教の話にとどまらず、社会全体の動きを反映した。人々は何にもまして説教を聞くため、こぞって庶民院や学寮のチャペルに集まった<sup>6</sup>。聴衆は、カルヴァン派とアルミニウス派、長老派と独立派、高教会主義国教会派と低教会主義国教会派など、互いに敵対する宗教的熱狂者たちのるつぼであった。その状況の中で説教するということは、危険な行為であったが、CP は忌避しなかった。

<sup>4</sup> Cf. Powicke, 18-49. G. R. Cragg, ed., *The Cambridge Platonists* (University Press of America, 1968) 7-16. C. Taliaferro and A. J. Tepley, eds., *Cambridge Platonist Spirituality*, 6-12. C. A. Patrides, ed., *The Cambridge Platonists* (Edward Arnold, 1969) 1-8. エルンスト・カッシーラー 花田 圭介 監修・三井 礼子 訳『英国のプラトン・ルネッサンスーケンブリッジ学派の思想潮流』(工作舎, 1993 年)。

<sup>5</sup> 『英国のプラトン・ルネッサンス』53-54 頁。なおカッシーラーは、CP に対する正当な評価については、シャフツベリー (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713 年) の功績が大きいことを指摘している。Cf. 『英国のプラトン・ルネッサンス』152-188 頁。

<sup>6</sup> P. S. Seaver, *The Puritan Lectureships The Politics of Religious Dissent 1560-1662* (Stanford University Press, 1970) 5.

## 2 ベンジャミン・ウィチカット (Benjamin Whichcote, 1609-1683)<sup>7</sup>

### 2.1 ケンブリッジ・プラトニストの「ソクラテス」

ウィチカットは、CP の創始者と見なされ、「その運動のソクラテス」と呼ばれる。CP の多くが彼の下で学び、感化を受けた<sup>8</sup>。その中には、スミス及びおそらくカドワースも含まれる。1626年、ウィチカットは17歳で PurC の牙城エマヌエル学寮に入学した。指導教員の一人は、PurC を堅持するアンソニー・タックニー (Anthony Tuckney, 1599-1670) であり、その教育はウィチカットには反動として働いた。BA と MA を取得後、同学寮のフェローに選ばれた。1634年、25歳でチューターに就任した。ウィチカットは学生たちが柔軟な思考力を養うことができるように、プラトン、キケロ、プロティノスといった古代の哲学者を読むように薦めた<sup>9</sup>。職歴としては、キングス学寮の学寮長やケンブリッジ大学の副総長などの要職を歴任した。

### 2.2 聖書講解に専念

ウィチカットは、自分を専門の研究者であると思わなかった。本を一冊も書かず、教育と学寮チャペル・教会での説教に専念した<sup>10</sup>。1636年、聖職者に叙任後、トリニティー教会の日曜午後の聖書講解者に任命された。その職責は約20年にわたり続けられた<sup>11</sup>。現存する98篇の聖書講話は、*The Works of the Learned Benjamin Whichcote, D. D. Rector of St. Lawrence Jewry, London, 4vols (Aberdeen, 1751)* に収録されている。彼は講話のための『覚書』を残しており、*Moral and Religious Aphorisms. Collected from the Manuscript Papers of the Reverend and Learned Doctor Whichcote (London, 1730)* として刊行されている。

### 2.3 古典テキストと聖句の協働

ウィチカットの聖書講話では、出典を明示した古典テキストの引用は、最小限に抑えられている。プロティノスの名前が明示されるのは、1回だけである<sup>12</sup>。ただし「流出」の思想への言及は見られる<sup>13</sup>。各講話において、多数の聖句引用があるが、引用の背景には、ウィチカットのプラトニズムがある。たとえば、魂の救済に関する彼の考えにおいて、

<sup>7</sup> ウィチカットの生涯については、cf. J. Tulloch, *Rational Theology and Christian Philosophy in England in the Seventeenth Century*, vol.2 (Elibron Classics, 2005) 45-116; F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*, 50-67.

<sup>8</sup> J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol.3 (Cambridge University Press, 1911) 589. C. Taliaferro and A. J. Teply, eds., *Cambridge Platonist Spirituality*, 12, 19.

<sup>9</sup> Cf. "Reflections", Sloane, (MS), 2716.4; J. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 204.

<sup>10</sup> J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol.3, 532. P. S. Seaver, *The Puritan Lectureships*, 5.

<sup>11</sup> J. B. Mullinger, *The University of Cambridge*, vol.3, 589-590.

<sup>12</sup> *The Works*, II, 160. Cf. D. Roberts, *From Puritanism to Platonism*, 205.

<sup>13</sup> *The Works*, III, 120. Plotinus, *Enneades*, 5.3.12.

「神に似る」(God-like) ことが重要な位置をしめるが、『覚え書き』の中に以下の文言が見られる。

宗教とは, *ὁμοίωσις Θεοῦ, κατὰ τὸ δυνατόν ἀνθρώπου* 人間に可能なかぎり神に似るようになること, である<sup>14</sup>。

プラトンの『テアイテトス』, 『パイドン』, 『国家』の当該箇所を想起させる文言である<sup>15</sup>。

『講話 XIII. 一人の罪人の回心』において, 主題聖句として提示されるのは『エゼキエル書』18章27節である。

悪しき者が自分のおかした悪に背を向け, 掟にかなう正しいことを行うなら, 自分の魂を生き返らせてもらえるであろう<sup>16</sup>。

ウィチカットのいう「回心」とは, 魂が生き返ることと, それによって善い行いの実を結ぶことである。それを論証するために, 多数の聖句引用を行ったのち, それらを「神に似る」という考えに収斂させるために, セネカからの明示的引用と聖句引用を行う。

セネカは言います。「人は聖く正しい者になりたいなら, 神に似るべきである。そして人が神を分有するなら, 現に聖く正しい者であり, これからもそのようであろう」。しかし, なぜ私は哲学者を引用すべきでしょうか? というのは, 使徒は, 聖と正義の原理により私たちは神の性質を分有すると述べるからです。『ペトロ書 二』2章4節<sup>17</sup>

聖句とセネカの関係は協働的・相互作用的である。セネカのいう「神を分有する」は, 聖句のいう「神の性質を分有する」であり, 聖句のいう「神の性質を分有する」は, セネカのいう「神を分有する」である。両者の協働に関連して, 『講話 LVII. 神の輝かしい顕現, そして人間の弁解できない無知』において, ウィチカットは, 「(キケロは), キリスト者と称するけれども, 理性を否定すると思われる人たちよりも, すぐれた神学者です」と, 断言している<sup>18</sup>。同様の考えは, 『覚え書き』の中の「霊的であることほど道徳的であることはない」という文言にも見られる<sup>19</sup>。

<sup>14</sup> *Moral and Religious Aphorisms*, No. 591.

<sup>15</sup> *Theaetetus*, 176B; *Phaedo*, 64A; *Respublica*, 613A.

<sup>16</sup> *The Works*, I, 241.

<sup>17</sup> *The Works*, I, 233. セネカの出典は不明であるが, 類似したものとして cf. Seneca, *Naturales Quaestiones*, I, Prologus, 12.

<sup>18</sup> *The Works*, III, 167.

<sup>19</sup> *Moral and Religious Aphorisms*, No. 969.

### 3 レイフ・カドワース (Ralph Cudworth, 1617-1688)

#### 3.1 すぐれた体系的思想家

レイフ・カドワースは、「すぐれた体系的思想家」と見なされる。未完の大著『宇宙の真の知的体系』(*The True Intellectual System of the Universe, 1678*)のゆえである<sup>20</sup>。1630年、13歳でエマヌエル学寮の寄宿生となり、1632年7月5日、ケンブリッジ大学への入学を許可された。学寮ではウィチカットから直接に教わったと思われる。カドワースは古代の哲学者たちの著作をはじめ、広範囲にわたる書物に親しんだ。1639年、22歳のとき優等でMAを取得後すぐにフェローに選ばれ、チューターになった。その学生の中には、ジョン・スミスやおそらくヘンリ・モアもいた。1644年、クレア・ホールの学寮長になり、1654年、クライスツ学寮の学寮長になった。人望に厚く「外交能力」に長けていたためか、動乱の時代にあつて失脚することなく要職を歴任した<sup>21</sup>。1688年6月26日、カドワースはケンブリッジの自宅で逝去し、クライスツ学寮チャペルに埋葬された<sup>22</sup>。

#### 3.2 『庶民院での説教—1647年3月31日』

この日の夕、30歳のカドワースは、庶民院の招きにより、ウェストミンスター聖マーガレット・チャペルで、庶民院議員約275名を前に説教を語った。それは、議会の勧めによりほどなく、*A SERMON Preached before the Honourable House of Commons, At Westminster, March 31. 1647. By R. Cudworth, B. D.*という題で刊行された<sup>23</sup>。おりしも議会と軍隊の対立が激化し、内戦の方向が急展開しつつあつた時期にあつて、中立を保つ余地はほとんどなかった。保身のため多くが説教を辞退するなかで、カドワースは説教を引き受けた。

##### 3.2.1 『創世記』からギリシャ哲学へ、そして再び『ヨブ記』へ

主題聖句は、新約聖書からとられている。

もし私たちが神の命令を守っているなら、まさにそのことによって、私たちは神を知っているということを、私たちは知る。私は神を知っていると言いながら、神の命

<sup>20</sup> Cf. C. Taliaferro and A. J. Teply, eds., *Cambridge Platonist Spirituality*, 20.n.85; John Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 20.n.87, 273-274.

<sup>21</sup> H. L. Stewart, “Ralph Cudworth, The “Latitude Man””, *The Personalist* 32 (1951) 164.

<sup>22</sup> 『宇宙の知的体系』を推奨した人物として、アイザック・ニュートン、ジョン・ロック、ライプニッツらがいる。Cf. John Locke, *Some thoughts concerning Education*, ed. John and Jean Yolton (Oxford University Press, 1989) 248; Leibniz, “*Consideration sur les Principes de Vie et sur les Natures Plastiques*”; *Philosophische Schriften*, ed. Gerhardt, vol. 4: 544.

<sup>23</sup> *The English Revolution I Fast Sermons to Parliament Volume 28 March-May 1647: 53-144*. 邦訳にあたり、G. R. Cragg, ed., *The Cambridge Platonists*, 370-407 所収の校訂テキスト、C. A. Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 90-127 所収の校訂テキスト、及び C. Taliaferro and A. J. Teply, eds., *Cambridge Platonist Spirituality*, 55-94 所収の校訂テキストを参照した。

令を守っていない者は嘘つきであり、その人の中に真理はない（『ヨハネ書 一』2:3, 4）<sup>24</sup>。

真に「神を知っている」とは、どういうことか？ 実際に「神の命令を守っている」ことから離れて、真に神を知っているということは、ありうるのか？ 主題聖句の提示の時点で、これからカドワースが語るであろう、PurCの教条主義と経験論の主知主義の双方に対する鋭い問いかけを予感させる。

開口一番、カドワースは『創世記』を引用し、「「善悪の知識の木」のことで忙しくしている人たち、すなわち「われわれの本好きのキリスト者たち」に対して、先ず「いのちの木」の実を味わうことに留意するよう呼びかける。「いのちの木」の実とは、キリストのいのちをもつ知識・善い行いに導く知識であり、何よりもキリストの命令を守ることによって得られる知識である。つまり「キリストのいのち」である。これに与ることができるのは、多くの本を読む者ではなく、「神から教えられる」者である<sup>25</sup>。

この点を明らかにするために、カドワースはギリシャ哲学に旋回し、「ある哲学者たちは、アレテーは教えられることができない、それはいかなる規則や教訓のようなものによっても教えられることができない、と断言しました」<sup>26</sup>という。ここでいうアレテーは、「キリストのいのち」のアナログアである。アレテーはソフィストたちによって教えられないことができないのと比例して、キリストのいのちも、PurCの教師たちによって教えられないことはできない。

とはいえ絶望ではない。カドワースはギリシャ哲学から『ヨブ記』に旋回する。「人間の内には霊がある。そして全能者の息吹が人間に理解を与える」<sup>27</sup>。つまり「私たちがこの霊に出会う場所は、他でもなく服従の道においてであります。キリストを知る知識とその命令を守ることとは、常に相伴って進み、相互に原因同士なのです」<sup>28</sup>。「服従の道」は、神知に至るための確証である。まさに愛智の道が、真知に至るための確証であるのと同様である。

### 3. 2. 2 古典テキスト引用の百花繚乱

カドワースは、「聖書から引き出されるいくつかの所見」に進む。そこでは古典テキストの引用が、暗黙の引用を含めて、百花繚乱である。両者の交互引用は、ここでも繰り返される。

<sup>24</sup> G. R. Cragg, ed., *The Cambridge Platonists*, 373.

<sup>25</sup> θεοδιδάκτος という考え方は、CPの基本精神に連なる。Cf. C. A. Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 59.n.31.

<sup>26</sup> G. R. Cragg, ed., 375.

<sup>27</sup> 『ヨブ記』32:8. G. R. Cragg, ed., 375.

<sup>28</sup> G. R. Cragg, ed., 375.

①第一の所見：「神の似姿」から神の直視への漸進

神の直視に至るためには、人間の内なる「神の似姿」を見ることから出発し、「キリストの意志に一致している生」・「私たちの内なるキリストの生」の道を漸進することが、不可欠である。カドワースはこれを、先ず『ヨハネ書 一』5章12節、『マタイ福音書』7章24節、『ヨブ記』8章14-15節、『ペトロ書 二』1章10節の四つの聖句で説明する。その上で、以下のようにギリシャ哲学に基づく敷衍へ展開する。

神の永遠の神意は、私たちがただちに目を向けるには、あまりにも眩しく輝かしい対象であります。私たちにとってより容易で安全なのは、私たちの心の中に反映されている神の善性と聖性の光線を見ることであり、そこにおいて私たちへの神の愛の優しく柔和な性格を読み取ることです。すなわち神への私たちの愛と、神の天的な意志への私たちの心からの服従においてそうするのです<sup>29</sup>。

プラトンの名前は明示されないが、『国家』VI～VIII巻における「太陽の比喩」・「線分の比喩」・「洞窟の比喩」が、カドワースの念頭にあることは明らかである。この論述に続いて、裏付けのために『創世記』4章4節以下、『創世記』10章8-9節、『ロマ書』8章15節、『箴言』3章8節の四つの聖句が引用される。

②第二の所見：神知に至るためには、キリストの命令への服従が不可欠

カドワースはここでも、『ロマ書』10章6-8節、『マタイ福音書』24章23節、『士師記』12章6節、『コリント書 一』13章2節の四つの聖句を引用した上で、「ある高貴な哲学者によって、ἀνευ ἀρετῆς Θεὸς ὄνομα μόνον アレテーがなければ神は名前だけである、つまり「浄さとアレテーがなければ神は空虚な名前にすぎない」と、いみじくも語られた」という。プロティノス『エンネアデス』所収「グノーシス派について」からの引用である<sup>30</sup>。

③第三の所見：キリストの命令への不服従は、真のキリスト者でない証拠

ここでも交互引用は維持されるが、そのなかで三つの古典テキストが引用される。一つ目は、偽キリスト者の抱く神観は自己投影にすぎないとして、アリストテレス『大道德論』から、「アリストテレスが述べる人のように、その人はどこへ行っても、何を眺めても、鏡の中に見るように、やはり自分に示された自分自身の顔を見たのです」という文言である<sup>31</sup>。二つ目は、神の受肉の目的は人間の神化であるとして、アタナシオス『受肉について』から、「神は人となった。それは私たちを彼自身において神化するためである」という文言である<sup>32</sup>。三つ目は、「神の形姿」・「神の性質」とは「善性」に他ならない

<sup>29</sup> G. R. Cragg, ed., 376.

<sup>30</sup> G. R. Cragg, ed., 380. Plotinus, *Enneades*, II.9.15.33, 39-40.

<sup>31</sup> G. R. Cragg, ed., 383. Aristoteles, *Magna Moralia*, 1213a20 からの自由な引用である。

<sup>32</sup> *De Incarnatione*, LIV.

として、プラトン『エウテュプロン』から、「アレテーと聖性が善である」という趣旨の文言である。

プラトンが『エウテュプロン』において語っているように、被造物におけるアレテーと聖性が善であるのは、神がそれらを愛しており、またそれらがそのように見なされるようにするかもしれないからではなく、むしろそれらがそれ自体において端的に善であるからです<sup>33</sup>。

## 4 ジョン・スミス (John Smith, 1618-1652)

### 4.1 夭逝の宗教哲学者

ジョン・スミスは、宗教哲学に卓越した学徒である<sup>34</sup>。1636年、18歳でエマヌエル学寮に給費生として入寮し、以後8年間にわたり研鑽を積む。そこで9歳年上のフェロー、ベンジャミン・ウィチカットに出会った。ウィチカットはスミスのチューターとなり、熱心な学習指導のみならず、苦学生の彼に経済的な支援も行った。二人の間には緊密な師弟関係が結ばれ、スミスは生涯彼から受けた恩を忘れなかった<sup>35</sup>。1640年、BAを取得し、1644年までにMAを取得した。1644年4月、クィーンズ学寮のフェローに選任され、1650年、学寮の学生監・教理問答教師に任命された。スミスは広範な読書と教養をもとに哲学的靈性を養い、それを学寮チャペルでの説教・講話に投入した。ウィチカットと同様に、本を1冊も書かず、説教・講話に徹したが、読書は歴史、哲学、数学、神学を含む広範囲に及んだ。特にプラトンや新プラトン主義の著作を精力的に読んだ。将来を嘱望されたが、健康が悪化し、1652年、34歳で夭逝し学寮チャペルに埋葬された<sup>36</sup>。彼の講話のうち10篇が、友人ジョン・ワージントンの編集により、『講話選集』(John Worthington, ed., *Select Discourses*, London, 1660)として収録され、後世に伝えられた。

### 4.2 『神知に至るための真の道・方法に関する講話』(A Discourse Concerning the True Way or Method of Attaining to Divine Knowledge)

なかでも最大級の評価を受けたのが、この講話である<sup>37</sup>。他のCPと同様に、聖句引用

<sup>33</sup> G. R. Cragg, ed., 384. Cf. Plato, *Euthyphro*, 10A, D-E.

<sup>34</sup> Cf. J. Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 121-193. E. T. Campagnac, *The Cambridge Platonists* (Oxford at the Clarendon Press, 1901), XXXIII.

<sup>35</sup> J. Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 124; F. J. Powicke, *The Cambridge Platonists*.

<sup>36</sup> Cf. S. Hutton, "Platonism, Stoicism, Scepticism, and Classical Imitation", in M. Hattaway, ed., *A Companion to English Renaissance Literature and Culture* (Blackwell Publishing, 2008) 44-57; Worthington, *Select Discourses*, 506.

<sup>37</sup> Cf. John Worthington, *Select Discourses*, XII-XIII; J. Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 141.



と並行して、古典テキスト引用が頻繁に行われている。

#### 4.2.1 聖句とギリシャ教父テキストの並記

講話の冒頭に、『詩編』111篇10節と『ヨハネ福音書』7章17節が提示され、アレクサンドリアのクレメンス『ストローマタ』III.5.42とIII.5.44が並記される。『詩編』によると、「智慧」に至る出発点は「主への畏怖」であり、「善き理解」をもつことができるようになる条件は、「主の命令を実行する」ことである。『ヨハネ福音書』によると、「神の意思を実行する」ことが、教説が神のものであるかどうかを証明する試金石である。クレメンスによると、「主に似る者となり、神知をもつ」という究極の境地は、「肉体の諸快楽によって打ち負かされる」ことがないように闘い続けることによって、到達可能となる。「神知」と「情欲によって支配されている者」とは、共存不可能である。神知に至るためには、「市民としての生き方に属することども」、すなわち市民としての倫理的行動が必要不可欠である。「命令を知っている」だけでは無力である。まだテキストが提示されている段階ではあるが、聖句と古典テキストとは共鳴を奏で始めている。

#### 4.2.2 古典テキストから聖句へ

##### (1) 感覚と生命をもつ神学

提示された双方のテキストにおいて、聖書のいう「智慧」(wisdom)と、クレメンスのいう「神知」(*γνώσις θεοῦ*)とは呼応関係にある。神知に至るための道・方法が「神学」(Divinity)であるが、それはPurCの教条主義的神学とは次元が違い、「神の学知の類い」(a Divine science)というよりは、むしろ「神の生の類い」(a Divine Life)である。それは「言葉の説明」ではなく、「霊的感覚の類い」、「感覚的及び生命的機能」によって味得される。

##### (2) 「似ている」ことによる議論

以上の議論の裏付けに引用される古典テキストが、プロティノスの「それぞれのものの知は似ていることによって生じる」という文言である<sup>38</sup>。これをスミスは、「あらゆるものは、それにぴったりした類似と相似をもつものによって、もっともよく知られます」と敷衍する。「神学」と「神知」とを結ぶものは、「ぴったりした類似と相似」である。そして類似・相似の尺度は、感覚と生命である。神学が、感覚と生命に溢れる神知に至ることを愛し求めるのであれば、自己の中に感覚と生命をもつこと、つまり霊的感覚の涵養が必要不可欠となる。

##### (3) 『箴言』の引用

スミスのいう霊的感覚とは、端的に「善き生」のことである。神の学知が真の学知となりうるためには、その内なる根本原理として善き生をもっていなければならない。説明

<sup>38</sup> 『エンネアデス』所収『悪とは何か、そしてどこから生じるのか』からの自由な引用である。Plotinus, *Enneades*, I.8.1. Cf. Aristoteles, *De anima*, 404b17-18.

のためスミスは、『箴言』に回帰する。「智慧は自分の家を建て、自分の七本の柱を切り出しました」<sup>39</sup>。愛智者の求める真の智慧が、完成した家であるとするならば、家の建築のために不可欠な「七本の柱」は、「善き生」である。それでは「善き生」の土台は何か。「主への畏怖は智慧の初め」<sup>40</sup>とあるように、神への畏怖である。それは「七本の柱」が象徴する「善き生」の土台であるとともに、建物全体が象徴する真の智慧の土台である<sup>41</sup>。

#### (4) 霊的感觉

霊的感觉の概念は、スミスの宗教哲学において中枢の位置をしめる<sup>42</sup>。神の直視という体験について、彼はプロティノスと新約聖書を引用し、次のよう説明する。

彼（神）は、「知性的接触によって」(νοηρᾶ ἐπαφή), とプロティノスが述べるように、「神に知性的に触れることによって」、もっともよく識別されます。すなわち、私たちは、「いのちの言葉を私たちの目で見、私たちの耳で聞き、私たちの手はそれに触れ」なければなりません。聖ヨハネの言葉でいえば、です<sup>43</sup>。

スミスは、プロティノスの「知性的接触によって」という文言を、「神への知性的接触によって」と敷衍する。νοηρᾶ ἐπαφή という文言は、『エンネアデス』所収の『徳について』の中に、これを示唆するものがある。

では、そのような人にとってのアレテーとは、それぞれどのようなものなのであろうか。それは知恵であり叡知であって、知性のもっているものを観ることに、その本領がある。だが、知性は（自らのもちものを）直接的接触によってもっている<sup>44</sup>。

この文言が語られるのは、神に似る者になることを達成した人という意味における、端的に「神」とも呼ばれうる人が、言及される文脈においてである。その人は、「知性のもっているものを観ること」ができ、「知性は（自らのもちものを）直接的な接触によってもっている (νοὺς δὲ τῇ ἐπαφῇ)」。スミスにとって、「知性のもっているものを観ること」は、魂の内なる知性が直接に神を見ることである。「知性は（自らのもちものを）直接的な接触によってもっている」ことは、魂の内なる知性が神に直接に触れることである。スミスのいう魂の内なる知性を感じるは、現実の感覚である。「魂にもある種の感覚がある」(Ἔστι καὶ ψυχῆς αἴσθησις τις) と言明し、これを「魂それ自身がその感覚をもって

<sup>39</sup> 『箴言』 9:1.

<sup>40</sup> 『箴言』 1:7.

<sup>41</sup> 『ヨハネ書 一』 1:1. *The True Way or Method*, 1-2.

<sup>42</sup> Cf. D. A. Michaud, *Reason Turned Into Sense: John Smith On Spiritual Sensation* (Peeters, 2017).

<sup>43</sup> *The True Way or Method*, 3.

<sup>44</sup> Plotinus, *Enneades*, I.2.6.13.

います。肉体がそうであるのと同じように」と説明する<sup>45</sup>。この言明の背後にも、プロティノスの思想がある。『エンネアデス』所収の『生命あるものとは何か、人間とは何か』の中に、「もし感覚が肉体を通して最終的には魂に至る動であるなら、どうして魂が感覚しないことがあるのか」という文言がある<sup>46</sup>。スミスは、さらに『詩編』の引用によって魂の味覚にも言及する<sup>47</sup>。

スミスは、今や総合的観点から「最善かつ最も真なる神知」の感覚について述べる。それは、「私たちの心（臓）の中にある天的温もりによって、私たちの内で焚きつけられる状態」である。天的温もりとは、「われわれの内なる聖性という生ける原理」<sup>48</sup>、生き生きと活動する霊的いのちである。スミスはこれを、『創世記』の聖句によって説明する。楽園の「知識の木」と「いのちの木」<sup>49</sup>は、聖性・霊的いのちを指す。神学という知識の木はいのちの木のそばに植えられ、聖性の樹液を吸収することによって、魂の内に善性の実を結ぶことができる<sup>50</sup>。ひるがえってスミスは、ピコ・デッラ・ミランドラを引用する<sup>51</sup>。それによると、ゾロアスターは、弟子たちに命の水の中に浴するように指示したという。スミスの解釈では、命の水とは、楽園の四つの川であり<sup>52</sup>、枢要四徳を意味する。いのちの木が供給する命の水とは、「真の善性」である。これを説明するためスミスは、「オリゲネス」に旋回する。

単なる思弁によって得られる浅薄で空虚な知識でしかないもの、それが諸推論や諸論証によって取り入れられるものです。しかし、真の善性から湧き出でるもの、すなわち「いかなる論証よりも神的なもの」とオリゲネスが言うところのもの、それが魂の中に神の光をもたらすのであり、いかなる論証よりも明晰で説得力があるのです<sup>53</sup>。

「いかなる論証よりも神的なもの」という文言の背後に、『ケルソス駁論』第 I 巻第 2 章がある<sup>54</sup>。この箇所でもオリゲネスは、ケルソスに対して、「ギリシャの証明」をキリスト教に適用しようとしていると批判した上で、次のように述べる。

<sup>45</sup> *The True Way or Method*, 3.

<sup>46</sup> Plotinus, *Enneades*, I.1.6.10-15. Cf. D. Michaud, “The Patristic Roots of John Smith’s *True Way or Method of Attaining to Divine Knowledge*” in Thomas Cattoi & June McDaniel, eds., *Perceiving the Divine through the Human Body: Mystical Sensuality* (Palgrave Macmillan, 2011).

<sup>47</sup> 『詩編』 34:9.

<sup>48</sup> *The True Way or Method*, 3.

<sup>49</sup> 『創世記』 2:9.

<sup>50</sup> *The True Way or Method*, 3-4; C. A. Patrides, ed., *The Cambridge Platonists*, 130.

<sup>51</sup> ピコ・デッラ・ミランドラ「人間の尊厳についての演説」佐藤三夫訳編『ルネサンスの人間論—原典翻訳集—』所収（有信堂高文社、1984年）219.

<sup>52</sup> Cf. 『創世記』 2:10-14.

<sup>53</sup> *The True Way or Method*, 4.

<sup>54</sup> Cf. D. A. Michaud, *Reason Turned Into Sense*, 109-111.

ロゴスには何らかの固有の論証があり、問答法によるギリシャの論証よりもいっそう神的であると言わなければならない。このいっそう神的な論証を、かの使徒は「霊と力の論証」と名付けている<sup>55</sup>。

ロゴスとは、キリストのことである。「何らかの固有の論証」、「いっそう神的」、「このいっそう神的な論証」という文言は、「いかなる論証よりも神的なもの」というスミスの文言と符号する。オリゲネスは、I.2 において預言者たちがもつ霊の感覚に言及するが、I.48 においてそれを「ある種の神的起源の感覚」、「神的感覚」、「感覚的ならざる感覚」と呼び、それらは視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五つの形態をとる、と述べている<sup>56</sup>。スミスは自らが確信する知性の感覚を説明するにあたり、オリゲネスに多くを負っていることがわかる。

## 5 ヘンリ・モア (Henry More, 1614-1687)

### 5.1 ケンブリッジ・プラトニストの典型

タロックの評によると、モアは「このプラトンの学派の中でも最たるプラトニスト」である<sup>57</sup>。彼も PurC の環境で育ち、1628 年、イートン校に送られた。その間も、PurC の教条主義に窮屈を覚え、自由で活力のある宗教を求めていた<sup>58</sup>。1631 年、エマヌエル学寮ではなくクライスツ学寮に入学した。同学寮フェローの叔父の計らいによるものである。モアのチューターは、学識と敬虔を兼備した面倒見のよい人であり、カルヴィニストではなかった。1636 年、BA を取得、1639 年、MA を取得後、1641 年、クライスツ学寮フェローとなった。以後、一介のフェローに徹し、研究と執筆に専念した<sup>59</sup>。読んだ著作の多さと、知的関心の多様性では、モアはウィチカットやスミスよりもカドワースに近いが、彼を凌駕している。モアが手がけた著作の範囲は、神学や哲学はもとより、テウルギアやカバラ、さらには魔術にまで及ぶ<sup>60</sup>。

<sup>55</sup> Origen, *Contra Celsum*, I.2.

<sup>56</sup> Origen, *Contra Celsum*, I.48. 『箴言』2 章 5 節.

<sup>57</sup> Cf. John Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 303.

<sup>58</sup> John Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 305-308.

<sup>59</sup> Cf. John Tulloch, *Rational Theology*, vol.2: 206.

<sup>60</sup> モアの著作に関する文献リストについては、cf. R. Crocker, *Henry More, 1614-1687 A Biography of the Cambridge Platonist* (Kluwer Academic Publishers, 2003) 207-215. モアの思想は、近年、デカルト哲学をイングランドに導入した点と、ニュートンの「絶対宇宙」の概念に影響を与えた可能性の点で、関心が高まりつつある。Cf. A. Rupert Hall, *Henry More Magic, Religion and Experiment* (Basil Blackwell, 1990) 107-241.

## 5. 2 「講話 IV. 『箴言』 1 章 7 節」

モアの講話のうち 12 篇が、彼の死後、友人のジョン・ウォージントンによって編集され、John Worthington, *Discourses on Several Texts of Scriptures by Henry More*. (1692) として出版された。ここで取りあげるのは、「講話 IV. 『箴言』 1 章 7 節〔主への畏怖は智慧の初めである〕」(Prov.i.7. The fear of the Lord is the beginning of wisdom)」という講話である<sup>61</sup>。大きめの活字で33頁の分量であるが、多数の聖書テキストと並行して、古典テキストからの引用が頻繁に行われている。

### 5. 2. 1 『箴言』 1 章 7 節の釈義

モアは、ヘブライ語聖書の yir'at yhwē rē'šit d't (The fear of the Lord is the beginning of wisdom) の yir'at (beginning) を、「入口」の意味に解釈する。つまり「智慧の初め」とは、ギリシャ的愛智の観点からは、「真の智慧への入口」である。それが、神への畏怖である。しかも神への畏怖はいくつかある入口の一つではない。「これ以外に真の智慧への入口はない」<sup>62</sup>。彼はこの確信を説得するために、神への畏怖についての説明と、聖書・「倫理学及び物理学・数学」<sup>63</sup>による論証へ進む。

### 5. 2. 2 神への畏怖と倫理的行為の一体性

モアのいう神への畏怖とは、気まぐれな神に対する迷信的恐怖の類いではなく、倫理的行為と一体の畏怖の念である。「神への畏怖とは、人の中に宿る腐敗に対して勝利することである」(『詩編』34 篇の随所)。「腐敗に対する勝利は、私たちに神的本性に与る者としてくれる。神的本性とはキリスト、すなわち神の智慧である」(『ペトロ書 二』1:4)<sup>64</sup>。

モアは、聖句の裏付けのために、聴衆になじみの『ヘルメス文書』に旋回する。Εὐσεβει, ὦ τέκνον. ὁ δὲ εὐσεβῶν ἄκρως φιλοσοφεῖ「子よ、神を畏敬しなさい。神を畏敬する者は最大限に智慧を愛する」<sup>65</sup>。モアは ἄκρως「最大限に」を、「最も効果のある仕方での意味に解釈する<sup>66</sup>。そこには、神への畏敬を初め・入口としてもつ愛智の道行こそが、愛智の名にふさわしいものであり、十全に善き行いの実を結ぶに至る。他方、神への畏敬から分断された知識の追求は、善き行いの実を結ぶに至らない、という認識が含意されている。

<sup>61</sup> John Worthington, *Discourses*, 85-118.

<sup>62</sup> John Worthington, *Discourses*, 88.

<sup>63</sup> この文言については、cf. John Worthington, *Discourses*, 101.

<sup>64</sup> John Worthington, *Discourses*, 95.

<sup>65</sup> Corpus Hermeticum, *Fragmenta*, 2B, section 2, line 4.

<sup>66</sup> John Worthington, *Discourses*, 95.

### 5.2.3 真の智慧への唯一の入口としての神への畏怖

モアは説明を補強するために、「共存不可能性」(incompossibility)による議論に進む。

#### (1) 新約聖書からの引用

その議論のために引用する聖句は、『コリント書 一』2章14節である。

自然の人は神の霊の事物を知覚しない。なぜなら、それらはその人にとって痴愚だからである。また、その人はそれらを知ることもしない。それらは霊によって識別されるものだからである<sup>67</sup>。

「自然の人」と「神の霊の事物」の知覚とは、共存が不可能である。パウロのいう「自然の人」とは、「神の霊」をもたない人である<sup>68</sup>。モアのいう「神への畏怖」をもたない人に相当する。パウロのいう「神の霊の事物」は、モアのいう真の智慧に相当する。したがって、神への畏怖をもたない人と、真の智慧を知覚することとは、共存不可能なのである。

#### (2) プロティノスからの引用

モアは、聖句の裏付けにプロティノスの文言を引用する。「なぜなら、眼が太陽の姿にならなければ、けっして太陽を見ることはできない」<sup>69</sup>。「眼が太陽の姿になっていない」状態と、「眼が太陽を見る」こととは、共存不可能である。プロティノスのいう「眼が太陽の姿になっていない」状態とは、モアのいう「眼が泥や汚物で覆われている」状態である。それは魂の眼が不正と不浄で覆われている状態であり、ひいては魂が神への畏怖をもたない状態である。「眼が太陽を見る」とは、魂の眼が究極のアイデアとしての善のアイデアを観ることである。それは真の智慧に至ることに他ならない。したがって、魂が神への畏怖をもたない状態と、神知としての真の智慧に至ることとは、共存が不可能である。魂は「真実の正と浄」なしに、真の智慧に至ることは不可能である<sup>70</sup>。

#### (3) フィロンからの引用

さらにモアは、プロティノスの思想を補強するために、フィロン『世界の創造』からの引用句を付加する。

*ὅτι πρῶτος ἀριθμῶν ὁ τέτταρα τετράγωνός ἐστιν ἰσάκις ἴσος, μέτρον δικαιοσύνης καὶ ἰσότητος.*  
諸数の先頭としての正四角の数4は等回数分等しく、正と等の尺度である<sup>71</sup>。

<sup>67</sup> John Worthington, *Discourses*, 99.

<sup>68</sup> 『コリント書 一』2:10-16.

<sup>69</sup> *Enneades*, 1.6.9.31.

<sup>70</sup> John Worthington, *Discourses*, 99-100.

<sup>71</sup> Philo, *De opificio mundi*, 51.1-3.

モアはこの引用句を、「その天的光体は、たしかにその聖なる正四角において生じさせられました。天のあの諸光体が、4日目に生じさせられたように」と解説する<sup>72</sup>。この解説の背景には、フィロンの象徴的数論に関するモアの理解と賛同がある<sup>73</sup>。「その天的光体」とは、プロティノスの引用句を受けて、善のアイデアを指す。「その聖なる正四角」とは、フィロンのいう、美しく秩序正しいコスモスの成立において枢要な意義をもつ数4をさす。善のアイデアを観ることに關していえば、数4はそれに至るために欠かせない魂のアレテーを象徴する。神知を味わうことに關していえば、数4はそれに至るために欠かせない神への畏怖を象徴する。要するに、コスモスの成立のために数4が枢要であるのと同様に、真の智慧への到達のためには、神への畏怖が枢要なのである<sup>74</sup>。

#### (4) アリストテレスからの引用

最後にモアは、フィロンのいう「正四角」(τετράγωνος)の意味を倫理的に解明するために、アリストテレス『ニコマコス倫理学』からの引用を行い、善き人とは、「真に善く、難点のない正四角の人」である、という<sup>75</sup>。ここでいう「正四角」とは、「心と生の直」であると、モアは説明する。それは神への畏怖である。正四角は、物体の高さ・深さ・長さ・幅をはかる尺度であるが、それは正四角が含む直角と、それがつくる垂直のゆえである。同様に、垂直に比せられる「心と生の直」というものがある。これをもっている人が、「真に善く、難点のない正四角の人」であり、それはとりもなおさず神への畏怖をもつ人である。この説明の背景にも、アリストテレスの幸福論に関するモアの理解と賛同がある<sup>76</sup>。引用句の背後には、プラトン『プロタゴラス』の善き人とアレテーをめぐる議論がある<sup>77</sup>。アリストテレスは、それを踏まえて幸福に関する議論を進め、「幸福であるためには、完成されたアレテーと完成された人生の両方が必要である」という<sup>78</sup>。モアが「真に善く、難点のない正四角の人」というとき、愛智者がそれに向かって邁進する究極目的としての、完成されたアレテー・完成された人生の幸福が念頭にあったと思われる。その幸福とは、パウロの言葉では「あの靈的な広さ、長さ、深さ、高さ」となる<sup>79</sup>。

以上が、モアのいう聖書、倫理学及び物理学・数学を総動員した「共存不可能性」の論証である。要するに、神への畏怖以外に真の智慧への入口はない。裏を返せば、「知のあの明は、生の浄の内から生まれる」<sup>80</sup>。

<sup>72</sup> John Worthington, *Discourses*, 100.

<sup>73</sup> Cf. Philo, *De opificio mundi*, 51.

<sup>74</sup> John Worthington, *Discourses*, 100.

<sup>75</sup> Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, 1100b21-22. John Worthington, *Discourses*, 100.

<sup>76</sup> John Worthington, *Discourses*, 101.

<sup>77</sup> Plato, *Protagoras*, 339A-347A.

<sup>78</sup> Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, 1100a3-4.

<sup>79</sup> 『エフェソ書』 3:18.

<sup>80</sup> John Worthington, *Discourses*, 101.

## 結語

CPの聖句と古典テキストの交互引用は、愛智者としてのキリスト者の魂における聖書と古典の対話の一断面である。聖書を精読し、翻って古典に照らして聖書を読み返す。今度は、より深化された聖書理解に照らして古典を読み返す。さらにもう一度、より深化された古典理解に照らして聖書の読みをもっと深化させていく。この相互作用の不断の繰り返しのことによって、智慧に裏打ちされた豊かな心情と、その心情に裏打ちされた倫理性が醸成されていく<sup>81</sup>。

## 後記

CPの哲学的靈性における哲学と宗教の融合と区別は、どのようになっているか（山本 巍氏）、CPの哲学的靈性において哲学が与えたインパクトは、いかほどであるか（田坂 さつき氏）、カドワース『宇宙の知的体系』において「自意識」の概念が、どのように展開されているか（中畑 正志氏）、スコラ哲学に比してCPの新しさは、どの点にあるのか（加藤 信朗氏）、その他の貴重なご質問に、心から感謝を申し上げます。

---

<sup>81</sup> 筆者がCPを理解する上で、特に裨益した参考文献は以下のとおり。

[CPの研究書]

John Tulloch, *Rational Theology and Christian Philosophy in England in the Seventeenth Century*, vol.2. *The Cambridge Platonists* (Edinburgh and London: William Blackwood and Sons, 1874)

Ernst Cassirer, *The Platonic Renaissance in England*, translated by J. P. Pettegrove (New York: Gordian Press, 1970)

邦訳：エルンスト・カッシーラー 花田 圭介 監修 三井 礼子 訳『英国のプラトン・ルネサンス』（工作社、1993年）

[CPの説教・講話に関する概説書]

C. A. Patrides, ed., *The Cambridge Platonists* (Edward Arnold, 1969)

C. Taliaferro and A. J. Tepley, eds., *Cambridge Platonist Spirituality* (Paulist Press, 2004)

[説教・講話全般に関する研究書]

John F. Wilson, *Pulpit in Parliament Puritanism during the English Civil Wars, 1640-1648* (Princeton University Press, 1969)

Paul S. Seaver, *The Puritan Lectureships the Politics of Religious Dissent, 1560-1662* (Stanford University Press, 1970)

なお拙著『ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性 スミス、ウィチカット、カドワースの説教・講話に通底する特質』（リトン、2017年3月）も参照した。